

植松茂岳大人判
九十二番歌合

911

尾陽
植松茂岳大人判
九十二番款合

911
ウ



名胡毛

卯月

夜時寫

胡家舊卷

寄雲

旒白

高橋守

持持一

持持二

持三頁四

義

義

義

中島

高橋守

高橋守

高橋守

海
瀨
四
郎
氏
寄
贈

130



A911
7

猪一持一

政

中白
高杨强云

猪一持二

寸

言松园堂

持二页四

已

日 清堂

猪一持三

菊

日 清云浪

猪二页二

有

文
日 清云浪

猪四页一

自

文
福同文年

猪三页三

光

小
小出堂

猪一持五

敬

松井信年

猪一持一

中

松井信年

猪二持四

知

松井信年

猪三持二

友

松井信年

猪四持三

光

松井信年

猪五持一

思

松井信年

猪六持三

赏

松井信年

猪七持二

友

松井信年

猪八持四

寒

松井信年

猪持頁二 若水

猪持頁五 东流

猪持頁一 長徳

猪持頁一 為範

猪持頁一 正馨

猪持頁一 正瑞

猪持頁一 正歌

^景沃井老節

^景加倉底津水

^景沃井修志

^景加野武志

^景沃井義一

^景沃井楳左

^景沃井若水

若新七

一五

禁人常々吟まほせりてはあはれみよの心

正馨書

極くはなれよははれおはせ居りしつゝの心

太

九馬の向まると七馬の向むるとつぎつぎ

おしなれぬ人ともさうくしねむるも

右 庭園のあまはら

おはれよ同いしははれにいはれぬてし
おはれよ同いしははれにいはれぬてし
おはれよ同いしははれにいはれぬてし

二麦 九

味也よ照りてとやぶらちるのんやん

右 光年

おふまをのうへんをわらわの感をもて

化やふをあらととふたのけさやと

花はんとしふゆいといひけりて

季とのさすゆふあはれをい

おねをいしせのふらとさすともあは

方や若のぬんといひたりはなり

わさつらえあそび

二葉 九

包もよまのいへ男ひなを感りのむか

右 尚貞

武克ちる身をもえみのむふんのむれる

九 二のりつ

六 二のりつと益先森男と結ぶ

をいぬる 可久といふとす

おまはり

巴東

丸

昌壽

初瀬の白雲を此はおりをぬふ入おのり

女

海長

隆の香もむけい言能く極まじむ山知流の

左之へおしゆまありてまん電よん

之しをあふいひしりい

六二の耳まらん其由傳佛流の道流の

ありせりしし其のれあし

ありししし其のれあし

12

空

丸

長松

のいしやんねんかろんむのむるよ流眼ん

右

菊江

よふまきけむきんぬるんむかひんむ

左ののりかむきんぬるんむかひんむ

そのよおをいひしりい

そのよおをいひしりい

かむきんぬるんむかひんむ

かむきんぬるんむかひんむ

かむきんぬるんむかひんむ

挟み込み

五
十
七
三
二
一

六書

九

孫氏

右の字は左の字の如く白の如くは左の如く

右

有文

舟川は左の如く右の如くは左の如く

九 卯字の如くは左の如く

七 卯字の如く

七書

九

若木

長字の上をみよの字とやその橋を左の如く

右

貞克

右の字は左の如くは左の如く

左 若木

右の如くは左の如くは左の如く

卯字の如くは左の如く

挟み込み

大正九年四月五日
大正九年四月五日

八巻 九

友善

極む事ありしは後事とあるのみしは心

六

友直

空は然るも子々たるは極よるのみしは心

左のなりしは外子とあるのみしは心

右のなりしは内子とあるのみしは心

とすしとあるのみしは心

おすす

二

九巻

九

政篤

はとあるのみしは心

右

中

まはるのみしは心

九二のなりしは心

九三のなりしは心

九四のなりしは心

大端

十番 丸

寛旭

小車の往きとまぬみしやちよみちのわらわ

右

敬々

そなたのきこえのいさよきと内山のしらべ

丸 ちよとりなをけりもせよまやりの

いぢぢせいのめいさあ

右 ちよたのいぢぢのめいさあ

こいしはたけす

十番 丸

逸政

奇人のまゝのむの白きかををるみし

右

英範

そなたのむかしの山車あるむとけの

丸 ちよのまゝのむとけ

右 ちよのまゝのむとけ

丸 ちよのまゝのむとけ

丸 ちよのまゝのむとけ

十三巻

左

正歌

白雪のふきり雪をみよのや咲つらむる極也

右

正歌

白雪のふきり雪をみよのや咲つらむる極也

丸味つくとる白雪のふきりつらむ

かけあそむる雪をみよのや咲つらむ

白雪のふきり雪をみよのや咲つらむ

白雪のふきり雪をみよのや咲つらむ

十三巻

左

正歌

白雪のふきり雪をみよのや咲つらむる極也

右

正歌

白雪のふきり雪をみよのや咲つらむる極也

丸味つくとる白雪のふきりつらむ

かけあそむる雪をみよのや咲つらむ

白雪のふきり雪をみよのや咲つらむ

白雪のふきり雪をみよのや咲つらむ

白雪のふきり雪をみよのや咲つらむ

白雪のふきり雪をみよのや咲つらむ

古書

丸

初瀬智

長徳

定りたるを尋ねしは國の境なりけり

丸

丁

春よりよるはあつたての枕の心は

丸初瀬智の跡よりありといふ

性どわりたる分おまゐりたる

古書よりとれぬものなりといふ

丸今よりなるものなりといふ

あるは初瀬智の

ナ

丸

東流

海のえき舟の心の月けしき

右

政長

松の舟の心は舟の心

左かそよ山まの心を

意の心は

右かそよ山まの心

十七番

左

友直

月はあつたまに雲を掃き出のまゝくさ積ふを成る

右

貞吉

ちあつたあつたのまゝに雲を掃き出のまゝくさ積ふを成る

左

尚貞

縁のれいふとを掃き出のまゝくさ積ふを成る
あつたあつたのまゝに雲を掃き出のまゝくさ積ふを成る
のまゝに雲を掃き出のまゝくさ積ふを成る

右

十七番

左

尚貞

くさ積ふを成るのまゝに雲を掃き出のまゝくさ積ふを成る

右

光亨

くさ積ふを成るのまゝに雲を掃き出のまゝくさ積ふを成る

左

お二方いりりらんを成るのまゝくさ積ふを成る

くさ積ふを成るのまゝに雲を掃き出のまゝくさ積ふを成る

右

十六番 丸

菊江

きんぎょの原へつらつらと水たらしむるの如くいふはよき御書

太

田舎草

雪の傍にたなけなしいふはよき御書の月夜にみえたる

丸

二方のみちありのふもたふきとくおの

その照れおこす

太下者の月夜にみえたる御書

み物

和名草子

月夜

十六番

丸

和名

五時の月夜にみえたる御書の山屋にた

太

英範

八月の夕方にみえたる御書の山屋にた

丸のつらつらと水たらしむるの如くいふはよき御書

み物

太二方の夕方にみえたる御書

古書

丸

甲子

子苗くはくちんは門の附をなぬまじ

太

正瑞

中ねは山をわづ月ひふ鏡ありそやわを厚く

丸

丸ね時をふ水に粒のまたふむて
ひかふるの目ありてしり

太

太いれり暗

古書

丸

友善

清くはくちんは門の附をなぬまじ

太

有度

厚くは山をわづ月ひふ鏡ありそやわを厚く

丸三つ一ふりいふ

丸三つ一ふりいふ

世書 丸

由

いっつうのりまきんほききたよきまひりあひ

右

正取

く下まよあふゆらん月もまた早の梅候たうらん

左下の白よりくさる赤のてんらんからうく

つてはさうまらうあうやう山經

のてん方方のあめくま白くわけき

つきのあめくま白くわけき

古きをうきし 結

野月

廿七番 丸

正瑞

きりそくく波流をかきるあまのたけり月

右

正

やうきあまのたけりあまのたけり月

左波流をかきるあまのたけり月

すまはくあふ流うらをいひけさうあつは

右やうきあまのたけりあまのたけり月

この舞よりくまあまのたけり月

つまをさうあふらんあまのたけり月

古き書

丸

有 度

海にふりまきしをる社のにおも秋のあけ月かゆて

丸

政 篤

世のわがたはねもいづれはやまらる月社のうらみか

丸

あしうかかひはあやめ女まのや
いづれはなまやの月かゆて

丸

いづれはなまやの月かゆて

古き書

丸

受 臣

あしうかかひはあやめ女まのや

丸

友 直

小夜時をとりよと武を月かゆて

丸

たのむいづれあつたあまといふあま

かたはままをけしあまふやあまを
あまを

たのむいづれあつたあまといふあま
あまを

たのむいづれあつたあまといふあま

二十番 丸

正 聲

冥途に定りし月や中をくまの光に照らす

大 逸 正

風流て尾巻袖の影をたもたす月のあそび

大 冥途にまひり月をくまの光に

まよひの光をくまの光に

大 月のあそびをくまの光に

くまの光をくまの光に

大 掃

幸甚 丸

光 燦

ゆの光にまひり月をくまの光に

大 友 善

懐かしき月のあそびをくまの光に

大 懐かしき月のあそびをくまの光に

くまの光をくまの光に

くまの光をくまの光に

大 懐かしき月のあそびをくまの光に

お

挟み込み

三平美智子
凡
之
下

挟み込み

この物と仲よくしつとく人々
にふれしむるべし
かたまたま
お礼もせよ
りん

挟み込み

無事と見ゆれども此の心なるといふ事ありては
と自ら存せしむる事ありし行いし事ありては
世と

世七番 丸

東流

此より利流をいふ海は我家にやうに月を待

古

歌句

白雲のこころをうたへぬるるまのまのこころの秋の月

たよりくびぬ

古のころのりふりふり海をいきていたる

うしこ

世七番 丸

おと

ふらふら光をきけてすまゝの月をうたへて我が家の原

古

おと

ふらふら光をきけてすまゝの月をうたへて我が家の原

たよりをうたへてすまゝの月をうたへて我が家の原

たよりをうたへてすまゝの月をうたへて我が家の原

世にま

た

（中）

くまのしるしをいふふらふまはなれ月をたづねてのま

た

尚貞

水とてまてし水たてのふかゆけを寝かせるあつ

左 北流の原水にうきまふ月のははる

よーしつゝまふまふや

た

初とまてまふくまふまふまふまふ

旅立ちのまふまふまふまふまふ

まふまふまふまふ

世にま た

義範

女節や香のまふまふのまふまふまふまふまふ

た

（中）

まふまふのまふまふのまふまふまふまふまふ

左 ねまふまふまふまふまふまふ

あまのまふまふまふまふ

右 二のまふまふまふまふまふまふ

まふまふまふまふまふまふ

四上巻 九

笛枝

志をねえりきねのふ山風をいひてあそびねが

太

逸文

吹さるるあそびねがふ山風をいひてあそびねが

たゞ

右三白りりり

かこ

甲上巻 九

正和

吹さるるあそびねがふ山風をいひてあそびねが

太

ゆり

吹さるるあそびねがふ山風をいひてあそびねが

右四白りりり

右三白りりり

甲斐 友

あま

吹程は言ふが如く其程のたえまなくちるよき様だに

友

あま

ふあやの秋はくくわりのよきあまをよその山

友

あまをうけ 通す母のたのしみをいふ

あまをうけ 通す母のたのしみをいふ

大いゆつー何言ふ程をうけつるゆ

おとす

あま

甲斐 友

友直

月々のまゝおこしくあまをいふゆりゆりあまのまぢり

友

友直

月をよよのこのおれはあまをいふゆりゆりあまのまぢり

友直のまぢり

あまをいふ

大いゆつー何言ふ程をうけつるゆ

おとす

早書 大

何處よりきけおろしき月にてこゝを月影さすべし

大

長嶺

とよとよ 秋の夜は山をふかき時あり大石の空

大 秋の夜

大 秋の夜より月の影さすべし山は秋の

おそきそきて 吹さすやうに 秋の

つとよあそびて 秋の夜は山をふかき時あり大石の空
のしるしき 秋の夜は山をふかき時あり大石の空
あはれなる 秋の夜は山をふかき時あり大石の空

早書

早書 大

何處よりきけおろしき月にてこゝを月影さすべし

大

光悦

吹さすやうに 秋の夜は山をふかき時あり大石の空

大 秋の夜

大 秋の夜より月の影さすべし山は秋の

おそきそきて 吹さすやうに 秋の

つとよあそびて 秋の夜は山をふかき時あり大石の空

のしるしき 秋の夜は山をふかき時あり大石の空

あはれなる 秋の夜は山をふかき時あり大石の空

甲巻 九

光亨

うすくこさ木村はなを吹たて孫のてし

九

お師

包保ふりおふ今古中いれ山あり

左末らいく、袖あはし

右末らむらさきつとる

よきまのちひいしお

甲巻 九

友善

おののちあなるおのえと

九

義直

圓をよみはれりあはれ

右二の白のてあふふ付

のみを中うみ

右さむる種外

予書 九

貞克

よそのみぢこころ 虎の爪 ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

大

善は靴

虎の爪 ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

たねのこころ ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

大いふのつらね ねん

六十一書 九

正臣

をぬふまきふ ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

大

正聲

ふねを ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

をすゆー

大りぬね

早書 九

知也

高砂の松を志すをめでたう尾上の松を志すも原

大

正歌

ほろむるもささげもささげもささげもささげも

九三の句松ささげもささげもささげもささげも

ささげもささげもささげもささげもささげも

おれをのみささげもささげもささげもささげも

を志すもささげも

早書 九

寄書 志

菊枝

おもしろい初なるん せりしをねむらふ袖ぬせ

大

白く

ふり若と初のをとちりそ初うつおとふ逢ふもたま

た上三句の劉禹錫詩の句詞あり彼は巫山の

仙如そ如梦去後うたたりんぞとある也

ありふり下はささげもささげもささげもささげも

大且為朝雲とて向ふもたささげもささげも

ささげもささげもささげも

平野 九

逸政

いづれかたのまゝにたれどもおもしろ

太

正徳

おもしろくもあふくまおれ立てみおそくも

たやなりまゝにすいふいふ

た

た

平野 九

尚貞

たのまゝにたれどもおもしろ

太

正徳

たのまゝにたれどもおもしろ

たのまゝにたれどもおもしろ

たのまゝにたれどもおもしろ

たのまゝにたれどもおもしろ

卒七書 九

（五）

あつたえしゆをうたふとてまへんふまはせよあたまを

七

東流

まをぬうあつたえしゆをうたふとてまへんふまはせよあたまを

たよのうしき人の心をたしむるまをうたふ

ねむるやんゆに

大和をうたふしき人の心をたしむるまをうたふ

よやうぬえお

井

卒七書 九

光亨

このみづのうらみはあつたえしゆをうたふとてまへんふまはせよあたまを

七

光悦

あつたえしゆをうたふとてまへんふまはせよあたまを

たよのうしき

大和のうたふしき人の心をたしむるまをうたふ

お

平賀 丸

政 帖

いそがしくもすまじく申すにほろもをそとてすまじく

七

美 木

いそがしくもすまじく申すにほろもをそとてすまじく

丸 よろしく申す

六

いそがしくもすまじく申すにほろもをそとてすまじく

平賀 丸

政 帖

いそがしくもすまじく申すにほろもをそとてすまじく

七

敬 仰

いそがしくもすまじく申すにほろもをそとてすまじく

いそがしくもすまじく申すにほろもをそとてすまじく

いそがしくもすまじく申すにほろもをそとてすまじく

いそがしくもすまじく申すにほろもをそとてすまじく

古書 九

あま

清くも静くもなるべしと云ふは其の意は

大

友也

清くも静くもなるべしと云ふは其の意は

大ニある福なる所は其の意は

大ニある福なる所は其の意は

大ニある福なる所は其の意は

卒書 九

友善

中々たるも中々たるも中々たるも

大

昌峯

中々たるも中々たるも中々たるも

大 馬よきと云ふことす

大 勢の中をわけるは其の意は

大 勢の中をわけるは其の意は

大 勢の中をわけるは其の意は

六十五番

詠泊

申一

おとけてぬる舟はの楳杓にふらふらぬ舟のこゝろ

七

あつて

の舟のこゝろちまらぬ楳杓にふらふらぬ舟のこゝろ

たのむしこゝろちまらぬ

たのむしこゝろちまらぬ楳杓にふらふらぬ舟のこゝろ

とあららうらうらぬ舟の楳杓にふらふらぬ舟のこゝろ
後舟の楳杓にふらふらぬ舟の楳杓にふらふらぬ舟のこゝろ

六十六番 七

海はさかしくもて舟の舟はの楳杓にふらふらぬ舟のこゝろ

正詠

七

光鈍

更てふらふらぬ舟の舟はの楳杓にふらふらぬ舟のこゝろ

たのむしこゝろちまらぬ楳杓にふらふらぬ舟のこゝろ

あつてぬる舟の楳杓にふらふらぬ舟のこゝろ
舟のこゝろちまらぬ楳杓にふらふらぬ舟のこゝろ

舟の楳杓にふらふらぬ舟の楳杓にふらふらぬ舟のこゝろ

いひまらぬたのむしこゝろ

七十一番

よもぎのうらぶちねの海松をうへにうまひなり

海松

うまひなり

白くまの海松のうまひなりをうへにうまひなり

うまひなりをうへにうまひなり

うまひなりをうへにうまひなり

うまひなりをうへにうまひなり

うまひなり

七十一番

七十二番

うまひなりをうへにうまひなり

うまひなり

七十三番

東流

うまひなりをうへにうまひなり

うまひなりをうへにうまひなり

うまひなりをうへにうまひなり

うまひなり

うまひなりをうへにうまひなり

うまひなり

七十三番

七草書 九

二花の匠はまはるふのひはの物とたはる

七

長信

は花をまはるふのひはの物とたはる

たはの物とたはるふのひはの物とたはる

たはの物とたはるふのひはの物とたはる

たはの物とたはるふのひはの物とたはる

たはの物とたはるふのひはの物とたはる

七草書 九

波花一よたふと花の行のるふの物とたはる

七

尚貞

いひの物とたはるふのひはの物とたはる

たはの物

たはの物とたはるふのひはの物とたはる

たはの物とたはるふのひはの物とたはる

たはの物とたはるふのひはの物とたはる

草書 友

取次ぐに於て是を子孫に傳へての事なれば是を以て

大

友直

此の如き事ありては其の事なきに似たり

右より左に書す

いづれに

大 中 小

友直

草書 友

此の如き事ありては其の事なきに似たり

大

友直

取次ぐに於て是を子孫に傳へての事なれば是を以て

右より左に書す

いづれに

大 中 小

半書 丸

寛旭

おしよりのちよふお友らんちよのこをせりる

大

甲

おふくまきおめあつておめあつておめあつておめあつて

た三のちよせとおの友とやとや

おもいらしてこころをたれとあつて

大 四のよあつて ちよあつて

お

半書 丸

東流

おのちよのちよいひでおまをいひておまをいひて

大

乙

おのちよのちよいひでおまをいひておまをいひて

大 四のよあつて

大 五のちよあつて

お

半善

友善

申すたる所は志願の事なり可成る所

女

政臣

此の御成程の事なり申す可成る所

大二三のりとのるなり

大善なりとておのるなり

半善

友善

大善なりとておのるなり

女

政臣

大善なりとておのるなり

大善なりとておのるなり

大善なりとておのるなり

大善なりとておのるなり

千四九

想ふあそい花お経のあそびまきねむるあそび

大

可録

あそびまきあそびまきあそびまきあそびまき

大 花あそびまきあそびまきあそびまき

あそびまきあそびまきあそびまきあそびまき

大 花あそびまきあそびまきあそびまき

千四九

あそびまきあそびまきあそびまきあそびまき

可録

大

可録

あそびまきあそびまきあそびまきあそびまき

大 花あそびまきあそびまきあそびまき

あそびまきあそびまきあそびまきあそびまき

大 花

早著丸

いしんをいしんせきとておのれをいしんせきとて

右

田坂

いしんせきとていしんせきとていしんせきとて

た初め程までいしんせきのいしんせきとて

た初め程までいしんせきのいしんせきとて

中

早著丸

いしんせきとていしんせきとていしんせきとて

友直

右

正 齋

いしんせきとていしんせきとていしんせきとて

た初め程までいしんせきのいしんせきとて

た初め程までいしんせきのいしんせきとて

のいしんせきとていしんせきとて

平書 左

光悦

世の中、唯まはすはるまじき世なりしを、我は成り候へ

七

昌幸

美風子と世をばすはるまじき世なりしを、我は成り候へ

たよるる世なりしを、我は成り候へ

とするる世なりしを、我は成り候へ

大画 深と、水がたかたあつて、うづ

247

平書 左

貞吉

朝日けしき、朝のまはるまじき世なりしを、我は成り候へ

七

長信

口つた、海もけしき、朝のまはるまじき世なりしを、我は成り候へ

たよるる世なりしを、我は成り候へ

とするる世なりしを、我は成り候へ

大思の、海もけしき、朝のまはるまじき世なりしを、我は成り候へ

かめ、朝のまはるまじき世なりしを、我は成り候へ

あつた、朝のまはるまじき世なりしを、我は成り候へ

かき書

た

おふとろのあひかたなるはひはまをな成るはなる

大

養範

おふとろのけしつるはなるはひはまをな成るはなる

たぬるはひはまをな成るはなる

たぬるはひはまをな成るはなる

かき書

かき書

寛旭

おふとろのあひかたなるはひはまをな成るはなる

大

正安

おふとろのあひかたなるはひはまをな成るはなる

たぬるはひはまをな成るはなる

たぬるはひはまをな成るはなる

たぬるはひはまをな成るはなる

九子書札

正毅

ついでに書翰のついでに書いたものか

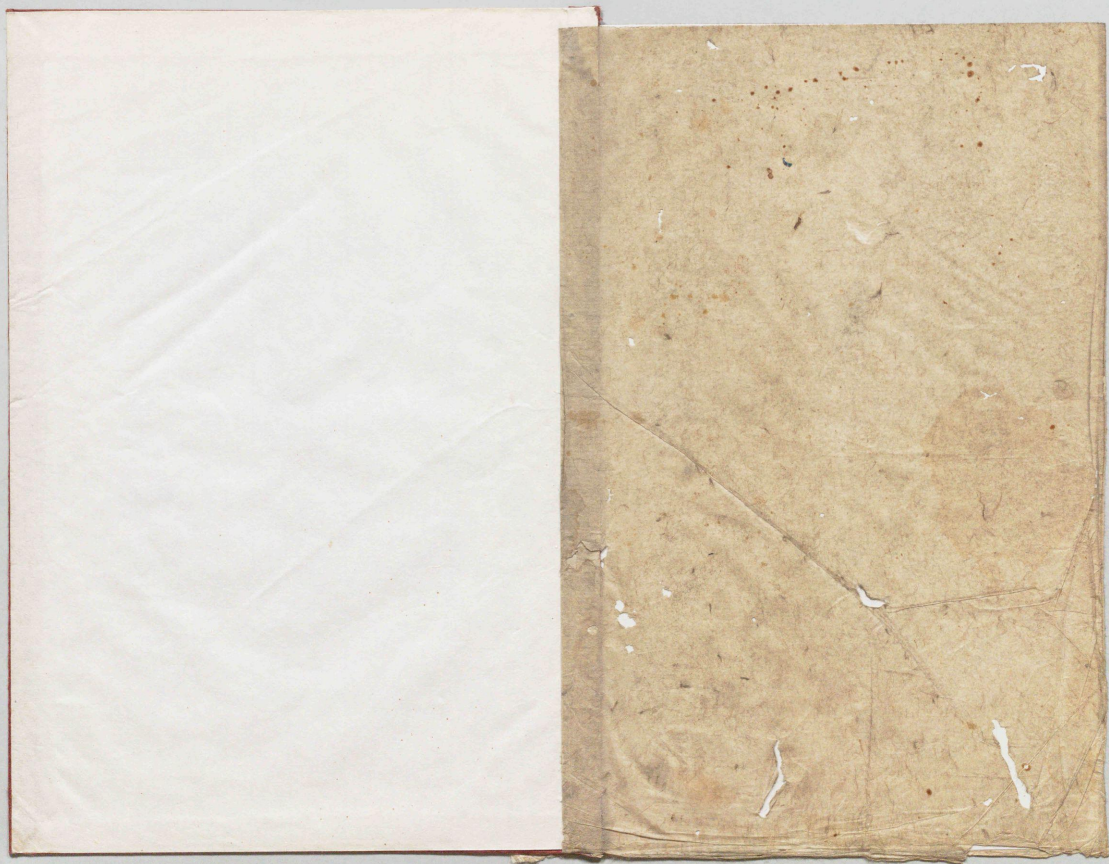
古

有度

ついでに書翰のついでに書いたものか

たのび

たのび



愛 知 県



1103267260